

「外国語活動」と「小学校英語」をつなぐ、 評価のあり方について

—到達度テストによる授業改善と指導と評価の一体化をめざして—

北海道／名寄市立中名寄小学校 教諭 久保 稔
申請時：北海道／中富良野町立中富良野小学校 教諭

概要

本研究は、外国語活動の良さを生かしつつ、評価基準と単元テストを活用した実践を通して、「慣れ親しむ活動から身に付く活動」へと円滑に移行させる方策についての研究である。

平成23年度より、小学校の第5・6学年で外国語活動が必修化され3年が経過した。コミュニケーション能力の素地の育成をめざし、全国各地でさまざまな実践が行われている。その外国語活動が、現在教科化に向けて議論が行われるなど、転換期を迎えている。これまで同様、コミュニケーション能力の素地を養うという基本路線は変わらないが、以下の点が変更になる。

- (1) 授業時数の増加（週1時間から週3時間へ）
- (2) 検定教科書の導入
- (3) 話すこと・聞くこと中心の指導から、読むこと・書くことを含めた4技能の育成

外国語活動が教科になるときに、懸念されることの1つに評価が挙げられる。これまでの、教師による行動観察や自己評価シートなどを活用した「主観的な評価」が行われてきた。しかし、教科になる以上、これまでの評価に加えてテストなどを活用した「客観的な評価」も必要になると考える。そこで、聞くことや話すことについての技能を見取るために、この2つの能力にかかわる確認テスト（到達度テスト）を用いた評価方法について提案していきたい。

1

はじめに

1.1 本研究の中に見られる用語の概念

本研究の中で使われている「外国語活動」、「コミュニケーション」、「教育評価」の3つの用語について、その意味や定義について触れる。

「外国語活動」は、「デジタル大辞泉」には、

外国語活動

小学校の高学年で週1時間（年間35時間）行われる外国語（原則として英語）の授業。あいさつ・買い物・遊びなど身近な場面を設定し、外国語を聞いたり話したりする活動を通してコミュニケーション能力の素地を養う。学習指導要領の改訂に伴い平成23年度（2011）から必修化された。

と記されている。

コミュニケーションという言葉は、多様な使われ方をしている。例えば、平成18年3月に中央教育審議会外国語専門部会から出された、「小学校における英語教育について（外国語専門部会における審議の状況）」の中では、「言語コミュニケーション能力を育成」、「言語やコミュニケーションに対する理解」、「国際コミュニケーションをより重視する」、「広い意味でのコミュニケーション能力を育成する」、「実践的コミュニケーション能力の向上」などとさまざまな意味で使われている。そのため、その意味も数多く存在するが、「大辞林 第三版」には、

コミュニケーション

人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う。

と記されている。

教育評価の意味は、「デジタル大辞泉」には、

教育評価

児童・生徒の知能・学力・適正・性格・身体・健康などの変化を、教育目的に照らして価値判定すること。これによって、教授計画改善や学習の動機づけをし、教育効果の向上を図る。

と記されている。なお、評価については、「測定と評価の違い」など、さまざまな概念が関連してくるので、それらの概念の持つ意味や位置づけを明らかにする必要がある。この点については、第3章で後述する（3.2「評価」と「測定」について）。

1.2 「英語活動」から「外国語活動」、「小学校英語」へ

平成23年度より、「英語活動」（小学校の総合的な学習の時間の中で行われていた学習活動）が、「外国語活動」（学習指導要領の改訂により、平成23年度より第5・6学年において領域として新設された学習活動）として完全実施された。英語活動については、その実施の有無、目標や内容、実施時数に至るまで、各学校に任されていた。そのため、技能面（skill）を重視し英語の運用能力が高まった学校、国際理解的な内容を重視し言語や文化に対する知識理解が深まった学校、全く実施していない学校、これらの間に相当の差が生まれるようになった。

外国語活動では、目標や指導内容が学習指導要領によって明記され、全国一律の指導が行われるようになった。外国語活動の必修化により、「英語の学習が好き」と回答（国立教育政策研究所教育課程研究センター、2014）したり、外国語活動導入前と比べて、中1の生徒に「成果や変容が見られた」と78%の教員が感じたりするなど（文部科学省、2015a）、一定の成果が見られた。その一方で、TOEFL スコアの国際ランキングにおいて、日本は参加国ならびにアジア圏において低位であること（Educational Testing Service, 2015）や、海外への日本人の海外留学生者数が経済協力開発機構（OECD）加盟国の中で下位であること（OECD 図

表で見る教育2014年版）などから、英語力の向上が喫緊かつ重要な課題となっている。そのため、英語が使える日本人の行動計画に基づき、大学教育の抜本的な見直しを含め、さまざまな改革が断行されようとしている。その一連の流れの中で、外国語活動が「小学校英語」（平成32年度より第5・6学年において教科として新設される）として実施されることになった。

1.3 外国語活動の改善点を読み解く

外国語活動から小学校英語へと移行することにかかわって、目標面では教科の目標という観点で、以下のように変更される予定である（表1を参照。下線部は変更点）。

次の学習指導要領における変更点の1つに、英語等における目標が新設され、「～ができる」という技術面の育成が明記されていることがある。

外国語活動では、さまざまな活動を通して、児童にコミュニケーション能力の素地を培ってきた。コミュニケーション能力の素地とは、「小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」（文部科学省、2015b）である。

評価は、現在、コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付きの3つの観点について、行動観察や発表観察、評価シートによる自己評価や相互評価などを活用して行っている。上記の3観点について、毎時間評価することは難しいので、単元を通してすべての観点を評価できるように留意して評価している。なお、能力や技能面の定着は求められていないため、技能面については評価しているのは少数である。ただし、学習指導要領は最低基準であるので、技能面について評価することについては、問題ない。

小学校英語では、これまで培ってきたコミュニケーション能力の素地に、読むこと・書くことも加えたコミュニケーション能力の基礎を養うことが目標とされている。これまで同様、他者とかかわる活動だけではなく、書くこと・読むことの活動では個々人で取り組む場面も想定される。そうすると、これまでの評価規準だけでは見取れない内容も出てくる。特に、技能面の評価については、行動観察や評価シート以外の方策を講じる必要がある。小学校

■ 表 1：外国語活動と小学校英語の対応表

	外国語活動	小学校英語
領域・教科の目標	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現にかかわって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
英語等の目標		・身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにする。 ・身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 ・アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。 ・アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。
内容	○ 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるように、次の事項について指導する。 ・ 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。 ・ 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。 ・ 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。 ○ 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。 ・ 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉も面白さや豊かさに気付くこと。 ・ 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方などがあることに気付くこと。 ・ 異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。	○ 言語活動 英語を理解し、英語で表現する能力を養うため、次の言語活動を2学年間通して行わせる。 「聞く」「話す」については、 ・ 基本的な英語の音声に慣れ、身の回りの語いや場面の<u>中での表現を聞き取り、状況から判断して適切に応じること。自分の考えや気持ちなどを英語やジェスチャーを使って、聞き手がわかるように話すこと。</u> 「読む」「書く」については、 ・ <u>文字や符号を識別し、正しく読むこと</u> ・ <u>単語を識別すること</u> ・ <u>文字を識別し、正しく書くこと</u> ・ <u>単語を識別し、正しく書き写すこと</u>

(注) 下線部は変更点。また、この表は、文部科学省(2015c)を参考に筆者が編集した。

英語の導入に関して、上記のような変更が生じることが予想される(文部科学省, 2015c)。

2

研究の動機と目的

2.1 研究の動機

外国語活動が必修化になったときのことを思い返すと、大小の差はあれ学校現場にはかなりの衝撃があった。特に、総合的な学習の時間で英語活動を行っているいなかった学校は、学校体制の構築から教材教具の用意に至るまで、対応に追われた。現在では、“Hi, friends!”を基本に実践が行われている。しかし、外国語活動を指導することに不安を感じている教員が多いことや、ALTが主体となって外国語活動が行われていることなど、課題が山積している。こ

のような状況下において、外国語活動の教科化への移行は、前回にも増した衝撃をもたらすと推察される。

筆者は、平成26年度、文部科学省の外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の1つである「小学校英語教育推進リーダー中央研修」(以下、中央研修)に参加した。この事業は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」に基づき、英語によるコミュニケーション能力を有し、グローバル化に対応した人材の育成を強化するため、外部専門機関と連携した効果的な研修を通して、英語教育に携わる者の指導力の向上を図るために実施されているものである。中央研修では、教室英語や絵本の活用など外国語活動の中で行われているものから、アルファベットの音(Phonicsを含む)や他教科と関連した内容を取り入れた内容言語統合型学習(Content

and Language Integrated Learning : CLIL) などの教科化を見据えた新しいものまで、幅広い内容について学んできた。

今回の中央研修を通して、教科化への移行は、必修化への移行のときより、ハードルが高いように感じた。その理由には、(1) 指導内容、(2) 技能 (skill)、(3) 評価、の3点が挙げられる。

(1) 指導内容

学習指導要領に即して慣れ親しむことを目標に実施された内容が、児童に身に付けさせなくてはならない内容になるのである。したがって、これまでのような楽しく魅力的な活動という要素に、わかるやできるという要素が付け加わることになる。また、単語を繰り返し発音したり、絵やつづり (spelling) を見て単語を認識したりするなど、練習や記憶といった活動にも重点が置かれることになる。

(2) 技能 (skill)

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画の中で、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」ことが目標案として提示されており、話すこと聞くことを含めた4技能を児童に習得させることが求められる。また、指導者として専科教員の積極的な活用が検討されているが、基本路線は、「高い英語力を持った学級担任が単独で指導する方法」とされており、教員自身の英語力の向上も求められることになる。これらのことから、技能面に重点を置いた指導が小学校でも進められることになる。

(3) 評価

これまでの態度面の評価に加えて技能面の評価が必要になる。コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動では、児童の態度や行動の様子に対して褒めたり励ましたりすることで、意欲が向上するような評価が行われている。それが、コミュニケーション能力の基礎を養う小学校英語では、意欲が向上するような評価に加えて、技能面の定着度合いを見取る評価が行われることになる。

筆者は、これまで児童の慣れ親しみを第一に考えながらも、児童が学習内容を付随的に習得できることを意識して外国語活動に取り組んできた。そして、児童に指導した内容がどれだけ身に付いているかを知りたいとずっと考えていたが、知る手段や方法がなかった。到達度テストは、現状の外国語活動という枠組みでは、実施する必要のないことかもしれないが、必要になるときが必ず来る。そこで、児童の定着度や理解度を測り、技能面を高める方策を検証したいと考え、本研究に取り組むことにした。

2.2 研究の目的

教科として新設されることになると、学習指導要領が告示され、検定教科書が配布され、ICT 教材などが整備されることになる。しかし、言語を扱う英語においては、教科書を使って教えれば4技能が身に付くというものではない。児童の興味関心、実態に応じた指導を行うことで、初めて4技能が育成されと考える。小学校英語と目標こそ異なるが、外国語活動が担任主導で行われているのは、児童の興味関心や実態を把握した学級担任だから仕組める活動があり、その結果としてコミュニケーション能力の素地を育成することができるからである。

そこで、本研究の最終的な目標を、行動観察や自己評価シートなどを活用した主観的な評価や、到達度テストなどを活用した客観的な評価資料を得ることで、児童の理解度や定着度を見取り、指導方法の改善に生かすこととした。学習指導要領を基準に考えると、現状では、児童の技能面を見取るころまでは求められていない。しかし、これまで述べてきたとおり、教科化に対応するためには児童の技能面を見取る手段が必要なのである。到達度テストを実施することで、これまで見えなかった児童の理解度や定着度を測ることができる。児童の能力を把握することができれば、将来的には児童が着実に技能を身に付けるために、授業改善を図ることもできる。小学校英語の教科化の流れを意識し、児童の技能面を見取るために到達度テストを活用した指導方法について、以下に評価の考え方や研究計画を示す (図1・2)。

(1) 主観的評価

- ・ 行動観察
- ・ 自己評価, 相互評価

(2) 客観的評価

- ・ 評価規準の設定…「話すこと」「聞くこと」に関する評価規準を 1 単位時間ごとに設定
- ・ 評価基準の設定…大問ごとの正答率に応じて A～C で評価
- ・ 到達度テストの実施…各時間の学習内容に応じた到達度テストを 1 単位時間ごとに実施

※本研究では, “Hi, friends! 1” の Lesson 6 と Lesson 7, “Hi, friends! 2” の Lesson 6 と Lesson 8 において, 到達度テストを実施。

▶ 図 1 : 評価の考え方

PLAN

- ① 話すことや聞くことに関して, 児童の英語力を適切に評価することで, 初歩的な英語の運用能力を育成することができるだろう
 - ・ 教科化を意識して, 評価規準を作成する
 - ・ 外国語活動の良さを生かしつつ, 教科化を意識した評価を導入することで, 慣れ親しむことから身に付くことへと, 円滑に移行することができるだろう
- ② 指導と評価の一体化を図り, 客観的な評価資料を得るために, 到達度テスト(確認テスト)を作成する
 - ・ 評価者の主観が入ってしまう行動観察による評価や自己評価ではなく, 客観的なデータが得られ指導の改善が図れる評価規準を策定する
 - ・ 児童の技能を測る到達度テストを作成する

PREPARATION

- ① 妥当性と客観性に配慮した話すことや聞くことにかかわる評価項目の作成(完了)
- ② 到達度テスト(Ver. 1)の作成
 - ・ 出題形式例…絵を見て質問に答える。英文を聞いて適切な絵を選ぶ
 - ・ 設問数…各単元 7～8 問
 - ・ その他…到達度テストを行う単元では, 学習内容に応じたテストを毎時間実施

実践(DO)Ⅰ

- 旭川市内の A 小学校(6 年)での実施
- 実践協力者による反省を基に, 到達度テストの改訂を行う

実践(DO)Ⅱ

- 旭川市内の A・B 小学校(ともに 6 年), C・D 小学校(ともに 5 年)での実施
- 実践協力者による反省を基に, 到達度テストの改訂を行う

実践(DO)Ⅲ

- 旭川市内の A・B 小学校(ともに 6 年), C・D 小学校(ともに 5 年)での実施

ASSESSMENT

- ① 研究協力者による意見交流会の実施
 - ・ 評価規準の吟味
 - ・ 到達度テストの実施による成果と課題の集約

RE-PLAN・RE-DO

- ① 研究を再構築し, 実践計画を立てる
 - ・ 評価規準や到達度テストの見直しを行い, 到達度テスト(Ver. 2)を作成する
- ② 評価規準および到達度テストの問題の一部を公開・発信する

(平成 26 年 3 月作成)

▶ 図 2 : 研究計画

ここでは、本研究に関連する評価にかかわる要素として、「評価」とは (3.1), 「評価」と「測定」について (3.2), 評価方法 (3.3), 評価対象 (3.4), 評価方法の適切さの判定 (3.5), Can-do 評価の実践 (3.6) の6つの視点から先行研究についてまとめるとともに、本研究との関連を明らかにする。

3.1 「評価」とは

外国語活動は教科ではないが、指導があるところに評価は欠かせない。評価の観点や評価基準を設定し、児童の学びを支援し、授業改善につながるより良い評価について考え、実践する必要がある(樋口・加賀田・泉・衣笠, 2013)。評価は、「成績をつけるために行う」、「テストを行って評価基準の達成度合いを見るために行う」、「児童を褒めて意欲を高めるために行う」などさまざまなとらえ方が存在する。しかし、児童も指導者も内省を行い、現状を分析し、新たな目標に向かって課題を設定して取り組むといったPDCA (Plan, Do, Check, Action) サイクルが必要となる(樋口他, 2013)。本研究は、上記のうち「テストを行って、評価基準の達成度合いを見るために行う」(樋口他, 2013)に当たる。そのため、今回作成した到達度テストや評価基準が適切かどうかについて検証するとともに、得られたデータを基にテスト問題や評価基準の改訂を行い、授業改善の方法についても考えていく。

3.2 「評価」と「測定」について

英語教育において、学習者の能力や行動などの優劣を判定する行為は、「測定」または「評価」と呼ばれる。『英語教授法辞典』(三省堂)と『英語指導法ハンドブック③指導技術編』(大修館)による解説をまとめると、「測定」とは、「能力や技能」を「量的」「客観的」に表示することを意味し、「評価」とは、「全人格」を対象として「質的」「主観的」な判断ならびに「フィードバック」機能や「意思決定」機能を含む概念と区別できる(金谷, 2003)。

言語テストに関する文献では、上記と異なった切り口で測定と評価が区分されている。Davies et al. (1999) や、池田・大友監訳 (1997: 21-27), 大友・スラッシャー監訳 (2000) による定義をまとめると、

「測定」(measurement) は、学習者の能力・資質を数量的に表示する行為、「評価」(evaluation) は、指導プログラムに関する意思決定のための情報収集行為としている。

3.3 評価方法

樋口他 (2013) では、評価の方法として、以下のものが挙げられている。

- ・正しい答えを選ぶ多肢選択やリスニングクイズなどの筆記テスト
- ・実際に英語でスピーチをしたりスキットで役割を演じたりするパフォーマンス評価
- ・振り返りシートなどを用いた自己評価や相互評価
- ・児童の作品やワークシートなどを蓄積しておき、それらを見直して評価を行うポートフォリオ評価
- ・児童の発表や行動観察による評価
- ・外国語への慣れ親しみがどれくらいできているかを見る can-do 評価
- ・学期の終わりなどに実施するアンケート、など

また、評価のあり方については、「外国語活動における評価は、外国語との出会いの科目としてふさわしいものでなければならない。つまり、児童が目標を知り、見通しを持って、自分の進歩・向上がわかり、頑張りが実感できるような、自己肯定感や有用感を育む価値でなければならない」とされている。本研究では、上記の中の筆記テストによる評価を扱う。テストを行うことで、児童一人一人が自分の進歩や向上の状況を知り、頑張りが実感できるように、テスト結果の活用についても検討していきたい。

3.4 評価対象

学習者に対する評価には、「行動」(performance) に対する評価と「特性」(trait) に対する評価がある。「行動の評価」とは、学習者の個々の行動そのものや、行動の結果残された作品や記録を評価するものである。(途中省略) これに対して、「特質の評価」とは、学習者の適正・知識・能力・性格など、ある時点で学習者に具わっている比較的安定した性質を評価するものである(金谷, 2003)。

本研究では、学習内容の理解度や定着度を見取るために実施するので、特性に対する評価を対象にする。

3.5 評価方法の適切さの判定

金谷（2003）では、テストの適切さを検討する判断指標として、(1)テストの信頼性（reliability）、(2)テストの妥当性（validity）、(3)テストの実用性（feasibility）、(4)テストの波及効果（backwash effect または washback effect）の4つの観点が表示されている。

(1)テストの信頼性は、同じ能力を持った受験者に対して同じテストを実施した場合に、常に同じ結果を出すかどうかという、測定結果の安定性のことである。

(2)テストの妥当性は、テストの結果がテスト（という測定手段）によって知ろうとしている対象をどの程度反映しているかという度合いのことである。

(3)テストの実用性は、テストの実施しやすさのことであり、テストをするために必要な人員、時間、材料、設備などの問題である。

(4)テストの波及効果は、テストが指導や学習に及ぼす影響である。

本研究では、テストの実用性と波及効果という2つの観点において、到達度テストがもたらす成果について示していく。

3.6 Can-do 評価の実践

長沼（2009）は、自律的学習者支援のために Can-do 評価を小学校英語活動への導入する意義について、以下のように述べている。

Can-do評価は量的な成績評価のための手段ではなく、学習者を動機づけるための質的な評価方法であり、小学校英語活動において、①教室で行っている活動に対して「できた感」を感じさせ、次にまたやってみようという自信をつけさせる、②自分が何ができるようになっていのかをモニターさせ、学習の指針を与えることで、「できるようになりたい」といった自律的な取り組みを促す、③肯定的なフィードバックを与えることで、「できるようになるんだ」といった児童と教師の間の信頼感や関係性を築き、学んでいることの価値を伝えるための助けとなることが期待される（pp.68-69）。

実際に自己評価カードを用いて毎回 Can-do 評価を行った小学校では、児童の「できる感」が育ち、児童が自律的に学習に取り組むことになると同時に、教師にとっても毎回の授業の「見取り」を助ける手

立てになっていた。

現在、文部科学省が進めている「英語教育強化地域拠点事業」において研究校として指定されている学校では、Can-do リストを作成して評価を行っている。本研究では Can-do 評価は行わないが、先行研究や拠点校の実践を参考に、客観的な評価資料を得る評価のあり方について考察していく。

4 実践

4.1 実践 I

4.1.1 年間指導計画・単元計画・毎時間の評価

A 小学校では、文部科学省（2014a）から出されている年間指導計画に準じて作成している。単元テストの実施に際して、一部年間指導計画を変更して実施していただいた。具体的には、年間指導計画に毎時間、表現（話すこと）と理解（聞くこと）にかかわる評価規準を位置づけて授業をしていた（図3）。

また、年間指導計画だけではなく、単元や各時間の目標にも表現と理解にかかわる評価の観点を位置づけた（図4、5）（文部科学省、2014a、2014b）。評価については、行動観察や評価シートを活用した日頃行っている評価と、単元テスト（到達度テスト Ver. 1）による評価を行っていた。

4.1.2 実施方法

A 小学校の6年生22名に、“Hi, friends! 2”のLesson 4で単元テストを実施。理解（聞くこと）の技能を見取るためにリスニング問題を、表現（話すこと）の技能を見取るためにスピーキング的な問題を、“Hi, friends!”のテキストを基にして作成した（図6）。

単元テストは、教室で22名の児童に対して一斉に行った。リスニングの音声については、パソコンの読み上げソフトを活用した。理由は、担任やALTなど聞き慣れている音声とは違う音声をういて技能を見取りたかったからである。テスト時間は、15分程度とした。

単元名	単元目標	指導内容			
		第1時	第2時	第3時	第4時
Lesson4 Turn right.	○積極的に道を尋ねたり、道案内をしりようとする。【関・意・態】 ○目的地への行き方を言ったり尋ねたりすることができる。【情】 ○英語と日本語では、建物の表し方が違うことに気付く。【気】	○町中にある様々な建物などの言い方を知り、日本語との違いに気付くとともに、道案内の言い方を知る。	○建物などの言い方や目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。	○目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。	○相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内したりしようとする。
	道案内をしよう	□目的地への行き方を言ったり尋ねたりすることができる。【表】	□道案内の表現を聞いて、目的地を聞き取ることができる。【理】	□目的地への行き方を言ったり尋ねたりすることができる。【表】	□先生や友だちを目的地へ案内することができる。【理】
	表現	Where is the ~? / Go straight. / Turn right. / Turn left. / Stop. / Excuse me. / Sorry.			
	語彙	park, hospital, bookstore, restaurant, supermarket, fire station, police station, convenience store, department store, post office, station			

▶ 図 3：小学校における外国語活動の年間指導計画

評価の観点	単元目標
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	・積極的に道を尋ねたり、道案内したりしようとする。
表現の能力	・目的地への行き方を言ったり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。 ◎目的地への行き方を言ったり尋ねたりすることができる。 ◎先生や友達を目的地へ案内することができる。
理解の能力	◎先生や友達がどこに行きたいか聞き取ることができる。
言語や文化への気付き	・英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付く。

▶ 図 4：単元の目標

導入・展開	○おはじきゲームをする。 ・誌面にある建物の絵から5つ選んで、絵の上におはじきを置く。 ・指導者が言う建物の絵におはじきがあれば、それを取る。 ・全て取れればあがりになる。	・おはじきゲームをすることを告げる。 ・誌面におはじきを置かせる。 ・誌面にある建物を繰り返し言い、児童にその音を何度も聞かせる。 ・日本語と英語の表し方の違いに気付くよう、何度も繰り返して言う。	◎英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付く。(行動観察)
	○単語練習 ・建物の言い方を英語で練習する。	・指導者やCDの後に続いて発音する。 ・リズムに合わせて言う中で、アクセントやイントネーションについても学ぶ。	□教師用絵カード(建物) □CD
	○ミッシングゲームをする。 (指導書 Hi, friends! 2 p.17 参照)	・児童に絵カードを提示する。 ・児童に目を閉じさせ、その間に黒板に貼ってある教師用絵カードから1枚を抜く。 ・目を開けさせ、What's missing?と尋ねる。	□教師用絵カード(建物) □デジタル教材
	○どこに行くのかな? ・目的地に道案内する言い方を聞く。 ・指導者と一緒に道案内の言い方を言う。 ・児童だけで道案内の言い方を言う。	・黒板に誌面 p.14, 15のみをかく。 ・目的地に案内する言い方を紹介しながら、到着した場所に教師用絵カードを置き、誌面の町を再現していく。これを建物2つほど繰り返す。 ・3つ目以降は、児童にも一緒に言うように促し、その後、児童だけに言わせるようにする。	◎目的地への行き方を言ったり尋ねたりすることができる。(行動観察)
	○サイモンセズゲームをする。 ・実際に立って動きながら、Go straight. / Turn right. / Stop. のときの動き方を確認する。	・Go straight. / Turn right. / Turn left. / Stop. のときの動き方を確認する。 ・デモンストレーションなどをして、進め方を理解させる。	

▶ 図 5：理解や表現にかかわる評価(1時間目)

4.1.3 結果と考察

単元テストにおける設問ごとの正答人数と得点率を表2に示す。

大問1は、誰がどこに行きたいかを問う問題である。リスニングの音声が普通の授業より速かったにもかかわらず、約7割の児童が正解することができた。問題形式が“Hi, friends! 2”のActivityと類似していたので、問われていることが理解でき正答を導き出すことができたと推察される。また、この単元

Lesson 4 まとめのテスト

年 組

① だれがどこに行きたいのかを聞き取り、線で結びましょう。

Ai

Hikaru

Sakura

Taku

Flower Shop

Post Office

Convenience Store

Library

▶ 図 6：単元テスト(大問1)

で学習した Where is the ~? の表現の定着が図られていることも要因と考えられる。

大問2は、欲しい物を買うためにはどの店に行ったらよいかを聞き取り、適切な建物を選ぶ問題である。大問1でも触れたが、普段よりもリスニングの音声が入ったために、児童の理解度を適切に見取ることができなかった。

大問3は、地図を使って道案内ができるかどうかを問う問題である。本来であればスピーキングテス

■ 表 2 : Hi, friends! 2 Lesson 4 における単元テストの正答数と得点率 (小数点以下は、四捨五入)

Hi, friends! 2 Lesson 4		A 小学校 (22 名)		設問の説明
		正答数 (人)	得点率 (%)	
①	設問 1	15	68	英文を聞き、その内容に合うように人名と建物を線で結ぶ。
	設問 2	14	64	
②	設問 1	※	※	英文を聞き、その内容に合う建物を選ぶ。
	設問 2	※	※	
③	設問 1	22	100	道案内の問題。矢印や止まれの記号が示されており、これらを使いながら目的の建物まで道案内を行う。
	設問 2	22	100	

(注) 大問 2 については、英文の聞き取りを複数回行ったため、理解度を正確に測定できなかった。

トで見取る内容かもしれない。しかし、ペーパーテストで何をどこまで見取ることができるのかを調べるために、今回はこのような形式で行った。Picture Cue を使って解答させる平易な問題形式だったこともあり、すべての児童が正解することができた。

本研究は、到達度テストなどを活用した客観的な評価資料を得ることで、児童の理解度や定着度を見取り、指導方法の改善に生かすことが目的である。客観的というのは、①問題の妥当性、②測定方法、③実施方法、④データ、などの課題が内在している。到達度テストを実施し問題の改訂を繰り返し行うことで、これらの要素について 1 つ 1 つ解決していく。実践Ⅱ・Ⅲにおいては、以下で示す成果と課題 (4.1.4) を受けて、②測定方法と③実施方法について見直しを行い、客観性を高めることにした (4.2.1)。

4.1.4 成果と課題

単元テストを行うことで、児童が授業内容をどの程度理解し、話すことや聞くことにかかわる技能を身に付けているかを見取ることができた。毎時間の行動観察などによる高い評価がつく児童と、単元テストで高得点を取る児童は、一致することが多かった。

最も興味深かったことは、外国語活動に楽しく取り組んでいるように見えた児童の正答率が低かったり、積極的に取り組んでいないように見えた児童の正答率が高かったりしたことである。表現や理解の能力については、それらが Activity に積極的に取り組む姿など外面に表れて評価できる児童と、外面には表れないため評価しづらい児童がいる。Activity への取り組みが消極的に見える児童は、行動観察を中心とした評価方法では、高い評価を得ることがで

きなかった。しかし、テストなどのさまざまな評価方法を取り入れることで、客観的な評価資料に基づいて適切に評価することができるのである。テストを行うことで、児童の理解度や定着度といった聞くことなどにかかわる技能を、客観的な資料を基に見取ることができる。また、その資料を使って児童の進歩や向上について褒めたり、頑張りを認めたりすることで、自己肯定感や有用感を育むこともできる (樋口他, 2013)。

課題については、以下の 4 点が挙げられた。

(1) 音声スピード

“Hi, friends!” のデジタル教材には、ノーマルスピードバージョンとスロースピードバージョンの 2 パターンの音声収録されている。単元テストを行った学級では、スロースピードバージョンの音声で授業を行っており、担任の先生もゆっくり英語を話しているということだった。そのため、繰り返し音声を聞かないと理解できないという問題が生じた。

(2) 例題

大問が 3 題あったが、例題は設けていなかった。“Hi, friends!” に準じて作成している問題とはいえ、児童が初めてテストを受けることを考えると、例題を設定するのが妥当であった。

(3) 何を見取るか

テストを実施していただいた先生から、見取る内容を絞った方がよいという意見をいただいた。到達度テストを行う目的は、その単元で新しく学習した単語や表現を見取ることである。そのため、既習事項をなるべく排除して見取りたい内容や技能に焦点を置くなど、何を見取るかを明確にした問題作りが

必要である。

(4) 問題数

単元のまとめという位置づけであったため、設問数が多くなってしまった。児童の負担を考え、毎時間の学習内容の理解度や定着度などを見取る確認テストを授業の最後に行うなど、問題数を含めて到達度テストのあり方について検討が必要である。

4.2 実践Ⅱ・Ⅲ

4.2.1 改善点

実践Ⅱ・Ⅲでは、実践Ⅰの反省を踏まえ、以下の3点を改善し、到達度テスト Ver. 2を作成した。

(1) 音声スピード

Ver. 2では、筆者が勤務している中富良野町のALTに協力を依頼し、“Hi, friends!”のスロースピードバージョンに準じて問題の英文を読み上げてもらい、それを録音したものを音源とした。

(2) 設問数と例題

Ver. 2では、単元テストから確認テストへと位置づけを変更し、児童の聞くことにかかわる技能を見取ることにした。なお、各単元4時間で構成されているので、前半の2時間を新出単語の意味の理解に重点を置き、後半の2時間を新出表現の理解に重点を置いた設問にした。また、どのテストも5分程度で実施できるように、設問数を調整した。さらに、大問ごとに例題を設定した。

(3) 何を見取るか

研究計画を立てた当初は、話すことと聞くことにかかわる技能を見取ることを目的としていた。しかし、テストだけで話すことにかかわる技能を見取ることは無理があるだけでなく、実践協力校にスピーキングテストを実施していただくには教育課程の問題などさまざまな障害があり、実践Ⅱ以降では実施することが難しくなった。そこで、聞くことにかかわる技能を見取ることに重点を絞ることにした。

4.2.2 実施方法

6年生ではA小学校(22名)に加え、B小学校(Lesson 6: 71名, Lesson 8: 70名)でも実施していただいた。また、5年生ではC小学校(25名)と

D小学校(55名)で実施していただいた。到達度テストを実施した単元は、6年生はLesson 6とLesson 8、5年生はLesson 7とLesson 8である。

4.2.3 結果と考察

実践Ⅱ・Ⅲのテスト結果について、表3～5に掲載する。

5年生と6年生で計4単元の確認テストを行った結果、いくつかのことがわかった。

第1に、単元の前半2回は、その単元での新出単語に関する問題を出題したが、どの設問も得点率が高かった。つまり、単語については、2時間の授業で多くの児童が習得できていることが推察される。

第2に、単元の後半2回は、熟語や表現に関する問題を出題したが、単語の設問ほど得点率が高くなかった。特に、理由などの要点を聞き取ったり、複数の文章を聞いたりする設問では、得点率が下がる傾向が見られた。

第3に、同じ単元を2人ずつの先生に実践していただいたが、得点率に大きな差が見られなかったことである。例えば、D小学校の先生は英語が専門であるが、C小学校の先生は英語が専門ではない小学校教員である。A小学校とB小学校の得点率も、大きな差は見られなかった。指導する教師の指導力や専門性の他にも、外国語活動の経験、学級集団としての力、学校体制、習い事などの地域環境が今回の結果に与えた影響は少なくはない。しかし、これらの要素や今回のテストの結果を鑑みると、外国語活動の必修化当初と比べて、英語にかかわる能力差は小さくなってきていると推察される。

4.2.4 成果と課題

実践Ⅰ同様、到達度テストを実施することで、行動観察では見取りにくい児童一人一人の能力面について見取ることができ、主観的な評価を補完することができた。到達度テストの実践に協力していただいた先生方からは、「30や13、50や15の発音の違いを問う問題があり、評価に役立てることができた」、「児童にとって負担がなく、実態に合った問題であった」など、到達度テストのよさについて言及する意見が聞かれた。また、到達度テスト後に実施した児童へのアンケートには、「英語のテストは驚いたけど自分なりによくできたと思いました。さらに英語の授業を頑張りたいと思いました」や、「ぼくは、

■ 表 3 : “Hi, friends! 2” Lesson 6における確認テストの正答数と得点率 (小数点以下は、四捨五入)

Hi, friends! 2 Lesson 6		A 小学校 (22名)		B 小学校 (71名)		設問の説明
		正答数 (人)	得点率 (%)	正答数 (人)	得点率 (%)	
第一時	設問 1	18	81	32	45	時刻を聞き、時計に針を書き込む。
	設問 2	11	50	28	39	
	設問 3	10	45	35	49	英文を聞き、内容に合う絵を選ぶ。
	設問 4	12	55	67	94	
第二時	設問 1	21	95	64	90	時刻を聞き、内容に合う時計を選ぶ。
	設問 2	21	95	68	96	英文を聞き、内容に合うように絵と時刻を結ぶ。
	設問 3	21	95	68	96	
	設問 4	21	95	69	97	
第三時	設問 1	21	95	57	80	英文を聞き、内容に合う時刻を選ぶ。
	設問 2	4	18	13	18	英文を聞き、2 人のスケジュール表に時刻を記入する。
	設問 3	16	73	41	58	
	設問 4	21	95	55	77	
	設問 5	12	55	36	51	
	設問 6	11	50	39	55	
第四時	設問 1	9	41	28	39	1 日のスケジュールを聞き、空欄に時刻を記入する。
	設問 2	13	59	33	46	
	設問 3	12	55	49	69	
	設問 4	20	91	52	73	
	設問 5	13	59	35	49	
	設問 6	15	68	48	68	

■ 表 4 : “Hi, friends! 2” Lesson 8における確認テストの正答数と得点率 (小数点以下は、四捨五入)

Hi, friends! 2 Lesson 8		A 小学校 (22名)		B 小学校 (70名)		設問の説明
		正答数 (人)	得点率 (%)	正答数 (人)	得点率 (%)	
第一時	設問 1	21	95	67	96	単語を 3 つ聞き、職業を表しているものを選ぶ。
	設問 2	21	95	66	94	
	設問 3	22	100	65	93	
	設問 4	22	100	70	100	英文を聞き、内容に合う職業を選ぶ。
	設問 5	22	100	69	99	
第二時	設問 1	22	100	70	100	英文を聞き、内容に合う職業を選ぶ。
	設問 2	22	100	70	100	
	設問 3	22	100	70	100	
	設問 4	22	100	70	100	
第三時	設問 1	22	100	70	100	英文を聞き、人名になりたい職業を線で結ぶ。
	設問 2	19	86	65	93	
	設問 3	19	86	64	91	

第四時	設問 1	22	100	70	100	スピーチを聞き、人名となりたい職業、その理由を空欄に日本語で記入する。 ※人名：設問 1 と設問 4 なりたい職業：設問 2 と設問 5 なりたい理由：設問 3 と設問 6
	設問 2	16	73	59	84	
	設問 3	8	36	15	21	
	設問 4	20	91	64	91	
	設問 5	13	59	42	60	
	設問 6	4	18	7	10	

■ 表 5：“Hi, friends! 1” Lesson 7における確認テストの正答数と得点率（小数点以下は、四捨五入）

Hi, friends! 1 Lesson7		C 小学校 (25 名)		D 小学校 (55 名)		設問の説明
		正答数 (人)	得点率 (% / 問)	正答数 (人)	得点率 (% / 問)	
第一時	設問 1	24	96	55	100	教科を表す単語を聞き、それに合う絵を選ぶ。
	設問 2	24	96	54	98	
	設問 3	20	80	48	87	曜日を表す単語を聞き、それに合う曜日（漢字）に○を付ける。
	設問 4	20	80	53	96	
	設問 5	20	80	37	67	
第二時	設問 1	24	96	53	96	自己紹介の英文を聞き、人名と好きな教科を線で結ぶ。
	設問 2	25	100	52	95	
	設問 3	24	96	51	93	
	設問 4	24	96	51	93	英文を聞き、内容にふさわしい教科を日本語で記入する。
	設問 5	24	96	49	89	
	設問 6	21	84	50	91	
	設問 7	23	92	50	91	
第三時	設問 1 (注 1)	—	4.52	—	4.38	英文を聞き、日本語で時間割を埋める。
	設問 2	—	2.5	—	2.4	自己紹介の英文を聞き、学校で勉強する教科と、好きな教科を日本語で記入する。
	設問 3 (注 2)	—	3.6	—	3.4	
第四時	設問 1	—	5.0	—	4.8	2 人の会話を聞き、曜日とそれに合う教科を日本語で記入する。
	設問 2 (注 3)	—	5.0	—	4.8	

(注 1) 得点率の欄には、5 問のうち正解できた個数の平均(問)を記入している。

(注 2) 得点率の欄には、設問 2 は 3 問、設問 3 は 4 問のうち正解できた個数の平均(問)を記入している。

(注 3) 得点率の欄には、6 問のうち正解できた個数の平均(問)を記入している。

英語はあまり得意ではないけれど、なんか楽しいと思います。英語のテストのとき、発音は苦手だったから自信はなかったけれど、意外にできてたからうれしかったです」など、英語のテストを前向きにとらえようとする記述が見られた。

課題については、①英文の吟味（I go to school at 7:50, too. が I go to school at 7:52. に聞こえた）、②リスニングの音源（聞き取りやすいスピードではあったが、声が小さかった。もう少しはっきり話してほしい）、③問題数（5 分程度で実施するには、問題数が多い。似たような問題もあったので、精査した方がよい）、④設問の精選（どの単語、どの表

現の習熟度を見たいのか、もう少し絞ってもよいと思った。なるべく以前学習した内容を排除し、習熟を見たいものに焦点が当たるようにするとよい）、などが挙げられた。

5 結論と今後の課題

5.1 研究の総括

本研究では、これまでの行動観察や自己評価シートなどを活用した主観的な評価に加えて、客観的な評価を取り入れた指導方法を提案するために、到達

度テストを行った。

実践Ⅰでは、到達度テストを単元のまとめとして位置づけて実施した。“Hi, friends!”のActivityに準じて問題を作成したため、児童はテストに対してそれほど抵抗感を抱かずに取り組むことができた。新出単語（この単元では建物）についても、Inputが十分になされており、定着している様子が見取れた。また、これまで外国語活動に楽しく取り組んでいるように見えた児童の正答率が低かったり、積極的に取り組んでいないように見えた児童が全問正解したりといった結果も見られた。後者の児童は、行動観察主体の評価では適切に見取ることができなかったかもしれない。しかし、単元テストを実施することで客観的な評価資料を得ることができ、後者の児童を適切に評価することができた。他にも、外国語活動を苦手としており、テストが全くできていない児童が数名いた。外国語活動の何が苦手なのかという原因を探りつつ、新出単語の導入やActivityの構成など、これまでの指導過程を見直す契機になった。

実践Ⅱ・Ⅲでは、4つの小学校で到達度テストを行った。新出単語を問う問題では定着している様子が見られ、熟語や表現を問う問題では定着しているとは言いきれないものの、聞いて意味を理解したりActivityで使用したりする段階まで到達していると考えられる。そして、指導者の専門性や外国語活動の指導年数に差があったが、結果に大きな差は見られなかった。『英語ノート』や“Hi, friends!”などの共通教材が配付されるようになったことで、教育の機会均等や教育水準の向上という点で一定の成果が出ていることを実感した。児童へのアンケートにはテストが楽しかったという記述が見られるなど、今回の実践からはテストへの抵抗感が低い傾向が見られた。これは、テスト問題が“Hi, friends!”と類似していることや問題自体がそれほど難しくなかったことにも起因していると推察される。指導者からは、到達度テストという新たな評価方法を実践することで、児童の英語力を多角的に見ることができたとの意見が聞かれた。理解度や定着度といった外面に表れにくい能力に焦点を当てて評価する点において、一定の成果を上げることができた。

5.2 今後の課題

児童の英語運用能力を測る上で、テストは避けて通れないものである。小学校英語の新設に伴い、公

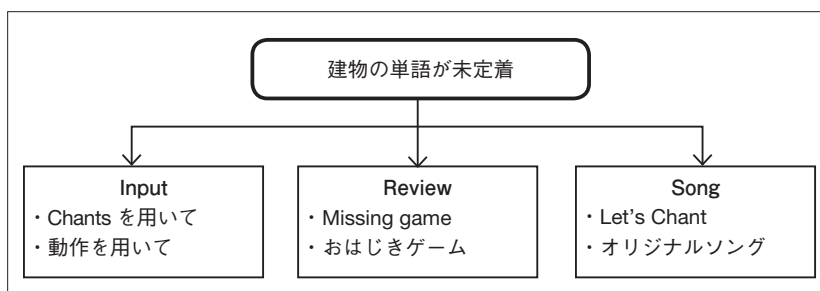
立の小学校でも今回のような到達度テストの実施が求められる。そのときまでに解決しなければならない問題について述べていく。

第1に、テストの妥当性という問題である。テストを通して客観的な評価資料（データ）を得るためには、問題や測定方法の質的向上を図りながら、到達度テストの妥当性を高めることが必要不可欠である。しかし、能力を数量表示することには限界がある。そして、学習者の行動を評価するのか特質を評価するのかによって、評価尺度の設定や、評価の妥当性に対する考え方も違ってくる可能性がある（樋口他, 2013）。テストの妥当性を追求しすぎると、学習者を置き去りにする結果にもなり得る。小学校という発達段階を生かして築き上げてきたコミュニケーション能力の素地が失われる危険性もある。テストの妥当性を高めるためには、これらの事項に配慮しながらも、“Hi, friends!”のActivityをはじめ、さまざまな形式のテストを実施する必要がある。リスニング音源のスピードや英文に使われる単語や表現など、実施するたびに明らかになる課題点を1つ1つ解決していくことで、テストの妥当性を高めていく。

第2に、評価方法の問題である。今回の研究では、評価においては、行動観察や自己評価シートはコミュニケーションへの関心・意欲・態度を評価するのに適しており、到達度テストは英語の理解度や定着度といった技能面を評価するのに適していることがわかった。しかし、英語にかかわるさまざまな能力のすべてをテストで測ることは不可能である。そのため、評価内容に合わせて、到達度テストや行動観察、自己評価や児童を褒めたり励ましたりといった評価方法を適切に組み合わせて評価することが大切である。

毎時間の評価において、どの評価を組み合わせるか、到達度テストをどの場面で行うか、話す・聞くだけではなく、読む・書くも含めた4技能を見取るためにはどのようなテストを実施したらよいかについて、年間指導計画や単元の指導計画、指導案に位置づける必要がある。実際に複数の評価を組み合わせた実践を行うことで、よりよい評価のあり方を探っていきたい。

第3に、指導方法の改善についてである。実践Ⅰ～Ⅲを通して、客観的な評価を取り入れた指導方法について見てきた。この指導方法を取り入れること



▶ 図 7：授業改善に向けたチャート図

で、定着度や理解度などについて見取ることができるのである（4.1 実践Ⅰ）。そして、小学校英語では、なじみのある定型表現を使って家族や一日の生活について、友達に質問したり質問に答えたりといった初歩的な運用能力（文部科学省, 2015d）を、外国語活動では、英語の定着度や理解度を見取ることができる。課題となるのは、到達度テストの実施場面と、授業改善の方法である。本研究では、Input の定着度を見取る要素が強かった。今後は、テストの妥当性の向上や問題形式の精選を行い、小学校英語で扱う単語や熟語の数、初歩的な英語運用能力のレベルに対応したテストの研究を行う。それと平行して、Intake や Output の場面において児童の技能面を総合的に見取れるテストの開発に取り組んでいく。授業の改善については、チャートによる

提示を検討している（図7）。このようなチャートを単元もしくは言語材料に応じて作成し、授業改善を図ることができるかどうか、実践していく予定である。授業改善においては、言語材料と指導過程の2つを軸として研究を推進していく。

謝 辞

本研究を実践する貴重な機会を与えてくださった公益財団法人 日本英語検定協会と関係者の皆様、ならびに選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。特に、有益なご指導とご助言をいただきたい大友賢二先生には、深く感謝いたしております。また、到達度テストの実施にかかわっては、実践を引き受けてくださった先生方、テストを受けてくれた児童の皆さんに、心より御礼申し上げます。

参考文献 (* は引用文献)

- * (株)朝日新聞社.「外国語活動」,「教育評価」,「コミュニケーション」.コトバンク(デジタル大辞泉・大辞林第三版),朝日新聞社 DIGITAL,
<https://kotobank.jp/word/>
- * Davies, A., Brown, A., Elder, C., Hill, K., Lumley, T., McNamara, T. (1999). *Dictionary of Language Testing*, Cambridge University Press.
- * Educational Testing Service. (2015). *Test and Score Date Summary for TOEFL iBT Tests*.
http://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
(平成27年4月20日閲覧)
- * 樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠智子(編著). (2013).『小学校英語教育入門』.東京:研究社.
- 樋口忠彦・金森強・國方太司(編著). (2005).『これからの英語教育—理論と実践—』.東京:研究社.
- 樋口忠彦・松並善秋・泉恵美子(編著). (2012).『英語授業改善への提言—「使える英語」力を育成する授業実践』.東京:教育出版.
- * 池田央・大友賢二監訳. (1997).『言語テスト法の基礎』. C.S.L. (Bachman, L.F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.)
- 石川祥一・西田正・斉田智里. (2011).『テストと評価—4 技能の測定から大学入試まで(英語教育学大系)』.東京:大修館書店.
- 金森強. (2011).『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣 うまくいかないのには理由がある』.東京:成美堂.
- * 金谷憲(編著). (2003).『英語教育評価論—英語教育における評価行動を科学する(英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ)』.東京:河源社.
- 兼重昇・直山木綿子(編著). (2008).『小学校 新学習指導要領の展開 外国語活動編 平成20年版』.東京:明治図書出版.
- 菅正隆(編著). (2009).『小学校英語 わいわいがやがや玉手箱』.東京:開隆堂出版.
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター. (2011).『小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料』.
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf?time=1441001495112(平成27年2月4日閲覧)
- * 国立教育政策研究所教育課程研究センター. (2014).『平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙』.<http://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/data/research-report/13-questionnaire-04.pdf>より
(平成27年2月4日閲覧)
- * 文部科学省. (2014a).『Hi, friends! 2 を活用した年間指導計画例』.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2012/07/10/1315115_02_1.pdf(平成26年5月3日閲覧)
- * 文部科学省. (2014b).『学習指導案 Hi, friends! 2 Lesson 4』.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2012/03/29/1319015_13_1.pdf(平成26年5月3日閲覧)
- * 文部科学省. (2015a).『英語教育の在り方に関する有識者会議(第3回)配付資料>【資料3-2】小学校における外国語活動の現状・成果・課題』.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2014/05/01/1347389_01.pdf(平成27年2月4日閲覧)
- * 文部科学省. (2015b).『現行学習指導要領・生きる力 Q&A 11. 外国語活動・外国語に関すること』.http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/11.htm
- * 文部科学省. (2015c).『小・中・高を通じた目標及び内容の主なイメージ』.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2014/10/10/1352461_01.pdf(平成27年2月4日閲覧)
- * 文部科学省. (2015d).『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』について.http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afiedfile/2014/01/31/1343704_01.pdf(平成27年2月4日閲覧)
- 文部科学省. (2015e).『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告—グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言—』.http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm(平成27年2月4日閲覧)
- * 長沼君主. (2009).『小学校英語活動における自律性と動機づけを高める Can-do 評価の実践』.*ARCLE REVIEW* No.5]. No.5, pp.65-74.
- 野口裕之・大隅敦子. (2014).『テストの基礎理論』.東京:研究社.
- * OECD.『図表で見る教育2014年版』.<http://www.oecd.org/edu/Japan-EAG2014-Country-Note-japanese.pdf>(平成27年4月20日閲覧).
- * 大友賢二・R. スラッシャー監訳. (2000).『<実践>言語テスト作成法』大修館書店 (Bachman, L.F. & Palmer, A.S. (1996). *Language Testing in Practice*. Oxford University Press.
- 投野由紀夫(編). (2013).『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』.東京:大修館書店.